

# デスマス形会話における独話的発話の談話機能

岡 崎 渉

## 1. はじめに

日本語では文を産出する際、デスマス形、非デスマス形<sup>1)</sup>のいずれかを選ぶ必要があり、相手との社会的関係や場面などによって使い分けられるとされている（日本語記述文法研究会, 2009）。だが、実際は同一談話において一方のスタイル<sup>2)</sup>のみが使われるのではなく、しばしば他方のスタイルが混用される（Ikuta, 1983；生田・井出, 1983；宇佐美, 1995, 2001；岡本, 1997；三牧, 1997等）。

例（1）は、初対面の二人による会話である。話者F12が、自分はお酒が飲めないことを明かし、話者F11が聞き手を務めている。この会話では主にデスマス形が使われているが、02, 06行目では非デスマス形が用いられている。

### 例（1）【P-10】<sup>3)</sup>

- 01 F12: あたしもでもハッピーな気分で酔えないんですよ。  
 02→ ハッピーになる前に（んー）どんどんあーって[なる hh。  
 03 F11: [え、下がるんですか。  
 04 F12: はい。  
 05 あの、ジンマシンとか出るんですよ（あー）、体が[受けつけなくて。  
 06→F11: [体が受けつけない。  
 07 あーそりゃちよっときついですね。

このような、談話の中で一時的に異なるスタイルが混用される現象についてIkuta (1983), 生田・井出 (1983) は、話者が主体的に行うスタイルの「シフト」であるとし、特定の機能が果たされていることを主張した。以来、デスマス形主体の会話（以下、デスマス形会話）で用いられる非デスマス形を中心に、シフトに関わる要因や機能等が研究されてきた（生田・井出, 1983；宇佐美, 1995, 2001；岡本, 1997；三牧, 1997等）。

シフトされる非デスマス形の中でも独話的発話は、聞き手への敬意を損なうことなく、話者の情意的態度を表すことができる一種のストラテジーであるとされている（Okamoto, 1999；Hasegawa, 2006等）。だが、非デスマス形主体の会話において独話的発話は、談話展開に関わる機能（以下、談話機能）を果たすことが指摘されており（平本, 2011；筒井, 2012）、デスマス形会話でもそのような機能を果たすのかを検討する必要がある。そこで本研究では、デスマス形会話における独話的

発話が果たす談話機能を明らかにする。

## 2. スタイルシフト研究の背景

### 2.1 スタイルシフトの機能

スタイルシフトの研究は、デスマス形会話においてシフトされる非デスマス形を中心に、数多くなされてきた (Ikuta, 1983, 2008; 生田・井出, 1983; 三牧, 1993, 1997, 2000, 2002, 2013; 宇佐美, 1995, 1998, 2001, 2015; 大浜・鈴木・冨田, 1998; Okamoto, 1999; Megumi, 2002; 陳, 2003; 伊集院, 2004; Hasegawa, 2006; 申, 2007; 宮武, 2007; ナズキアン, 2007; Cook, 2008; Saito, 2010; 岡崎, 2017, 2018 等)。シフトを説明する上でしばしば援用されるのが、ポライトネス理論 (Brown & Levinson, 1987)<sup>4)</sup> である。ポライトネス理論に従えば、非デスマス形へのシフトは、丁寧さが求められるデスマス形会話において、親しみの表示や心理的距離の短縮、相手への同調といった情意的機能を果たすものとして説明される (生田・井出, 1983; 宇佐美, 1995, 2001; Okamoto, 1999; 三牧, 2000, 2002; 陳, 2003; Hasegawa, 2006; 申, 2007等)。例えば宇佐美 (2001) は、初対面会話をデータに、会話の時間経過に伴うデスマス形、非デスマス形、それぞれの使用頻度の推移を、話者間の心理的距離の指標として見なしている。

一方で、非デスマス形へのシフトは、情意的機能だけでなく、談話展開に関わる機能 (以下、談話機能) も果たすことが主張されている。会話の流れ、或いは論理展開の明示 (生田・井出, 1983)、新話題への移行の明示 (三牧, 1993; 宇佐美, 1995)、話題の主要な流れの維持 (宇佐美, 1995) といったものである。しかし、これらの機能は、常に同様の発話環境で果たされるわけではなく、大浜・鈴木・冨田 (1998) も指摘するように、非デスマス形と発話時の状況がアドホックに結び付けられているだけとしか言えない。そのため大浜・鈴木・冨田では、シフトが談話機能を果たすこと自体が否定されている。しかし、大浜・鈴木・冨田で論じられているのは、シフトそのものによる機能であり、シフトされた非デスマス形による機能ではない。非デスマス形それ自体による機能も、シフトが起こる要因ではあるため、「なぜシフトが起こるのか」という問いに答えるためには、「非デスマス形へのシフトによる機能」だけでなく、「シフトされた非デスマス形による機能」も同じく検討される必要がある。

### 2.2 非デスマス形に混在する異なるスタイル

では、非デスマス形へのシフトは、情意的機能を果たすためだけに行われるのだろうか。「非デスマス形」は「常体」や「普通体」とも呼ばれ、多くの研究では、文末に「です／ます」を欠いているという形態上の特徴から、一つのスタイルとして扱われているが、機能面から見ると、同じ非デスマス形であっても異なるスタイルが混在している。

Cook (2002) は、非デスマス形について、話し手の情意的態度を表すインフォーマルスタイル (IF) と、発話の命題内容が強調されるインパーソナルスタイル (IP)

の二種類が混在することを指摘している。その特徴としてIFは、終助詞や文末の上昇音調、母音の引き伸ばし、倒置（例「おいしい、これ。」）、音の縮約（例「読まない」→「読まねー」）といった affect key と呼ばれる要素が共起する。IPは、affect key が共起しておらず、主に裸の非デスマス形が用いられる。丁寧さが求められるデスマス形会話において、IFは聞き手への丁寧さを損なうため、使用は控えられやすいが、IPは話者の情意的態度を主張するものではないため、しばしば用いられる。

ナズキアン（2007）、Ikuta（2008）、Saito（2010）は、デスマス形会話である制度的会話<sup>5)</sup>をデータに、IPに相当する非デスマス形に焦点を当て、その生起しやすい発話環境や談話機能を検討している。テレビの対談番組をデータに用いたIkutaは、司会者がゲストの発話に対し、繰り返しや先取り、心情の代弁等を行う際に用いる非デスマス形は、ゲストによる語りの場を維持する機能を果たすことを示している。Ikutaによると、非デスマス形は談話の主たる流れから外れた発話であることをマークし、話題の流れや参与役割をコントロールする手段として利用できるという。Ikutaと同様に、ナズキアン、Saitoの研究も、非デスマス形へのシフトが、情意的態度を表示するためだけに行われるものではないことを示している。

しかしながら、これらの研究で用いられたデータは制度的会話だけに、デスマス形会話であっても、日常会話には頻繁に用いられる独話的発話については論じられていない。本稿での「独話的発話」とは、会話において相手に聞かれることを承知の上で発せられる「聞き手不在」（仁田，1991）の発話である。例えば、何かを思い出そうとするときの「なんだっけ」や、率直な驚きや心情を表示するときの「すごーい」等である。独話的発話は、「聞き手不在」の発話であるという点でIFとは異なり、また、話し手の情意的態度を表しているという点でIPとも異なる（岡崎，2018）。

### 2.3 独話的発話の機能

デスマス形会話における独話的発話については、Okamoto（1999）、三牧（2000）、Hasegawa（2006）等で言及されている。これらの研究において独話的発話は、聞き手への敬意を損なうことなく、情意的態度を表す手段であると見なされている。デスマス形の使用が求められる会話において、雰囲気や緩和したり、相手との心理的距離を縮めたりする手段として用いられているという主張である。では、デスマス形会話における独話的発話は、そのような話者の情意的態度を表すためだけに用いられるのだろうか。

シフトの研究ではないが、筒井（2012）は、友人間の雑談におけるやりとりのパターンを、話題と連鎖組織<sup>6)</sup>の枠組みから網羅的に記述する中で、独話的発話の機能にも言及している。筒井によると、話題の開始は独話的発話をきっかけになされる場合もあるという。平本（2011）は友人間の雑談をデータに、会話分析の手法を用い、独話的発話による「話題アイテムの掴み出し（以下、「掴み出し」）」という現象を指摘している。「掴み出し」とは、「話題の境界」（Schegloff & Sacks, 1973）

という、話題を適切に終結・移行させることも、継続させることもできるタイミングでの独話的発話であり、「直前の話題（の少なくとも一部分）の内容を名詞（句）の形で表すアイテムが含まれ、かつそれ自体ではその話題について展開を行う命題内容をもたない発話」（p.102）とされる。この「掴み出し」は、日本語母語話者と日本語学習者による初対面のデスマス形会話をデータに用いた岡崎（2016）でも観察されている。

例（2）（岡崎，2016：15）

- 01 J05: なんか若い人の、敬語ってたまに、間違ってます[よね〈笑〉。  
 02 L06: [んー。  
 03 (1秒)  
 04 J05: んー。  
 05 (2秒)  
 06→J05: 敬語かー。  
 07 J05: そっか。  
 08 L06: んー毎回先生と(んー)、メールのやり取り(んーんーんー)をするとき、イ  
 09 ンターネットで敬語を、調べて〈笑〉。  
 10 J05: 間違いないですそれは〈笑〉。

例（2）では、01行目で日本語母語話者（J05）が「若い人の敬語」について、デスマス形で話し、02行目で日本語学習者（L06）が「んー」と応じた後、03-05行目で、間隙と実質的な意味をもたない発話により「話題の境界」が形成される中、06行目でJ05が「敬語かー」と独話的発話を行っている。

06行目の「敬語かー」が、平本（2011）の言う「掴み出し」にあたる。これにより、直前まで話されていた「敬語」が取り立てられ、「敬語」に関する話題を継続しやすい状況が作られている。一方で、この発話は独話的発話であるがゆえに、相手は反応を示しても示さなくてもよく、「敬語」の話題を継続させないことも可能な状況となっている。この例から、シフトされた独話的発話は、話題管理という点で談話機能も果たすことがわかる。だが、岡崎（2016）は日本語学習者による独話的発話の使用実態に焦点を当てたものであり、独話的発話の談話機能について、詳細は検討されていない。

## 2.4 本研究の目的

以上の先行研究から、デスマス形会話における非デスマス形へのシフトには、情意的機能だけでなく、談話機能も関与していることがわかる。しかし、非デスマス形の中でも、独話的発話の談話機能は十分な検討がなされていない。本研究では、デスマス形会話において独話的発話がどのように談話展開に関与しているのかを明らかにする。これにより、「なぜシフトが起こるのか」という、スタイルシフトの研究に一貫する問いに対する答えの一端を提示する。

### 3. 方法

#### 3.1 データ

用いたデータは岡崎（2017, 2018）と同じく、2011年に広島県の大学で収録された初対面同学年の二者による雑談に加え、2010年から2011年にかけて兵庫県の大学で収録された初対面二者間の雑談、計11組（約290分）によるものである。データ概要を表1に示す。

表1 会話データの概要

会話 No. (会話時間：分)	ペアの組み合わせ (M：男／F：女)	
P-01 (22)	F01 (社会人・27歳)	F02 (社会人・26歳)
P-02 (19)	F03 (院生・20代半ば)	F04 (院生・20代後半)
P-03 (22)	F04 (院生・20代後半)	F07 (社会人・20代後半)
P-04 (18)	M01 (院生・30代半ば)	F05 (院生・40代)
P-05 (22)	M02 (学部生)	M03 (学部生)
P-06 (22)	M03 (学部生)	F06 (学部生)
P-07 (17)	M04 (学部生)	F02 (社会人・26歳)
P-08 (18)	F01 (社会人・27歳)	F08 (学部生)
P-09 (49)	F09 (学部生)	F10 (学部生)
P-10 (50)	F11 (学部生)	F12 (学部生)
P-11 (33)	F13 (学部生)	F14 (学部生)

協力を得た会話参加者は、男性が4名、女性が14名、計18名であった。内4名(M03, F01, F02, F04)は2度会話に参加している。正確な年齢は不詳な者もあるが、概ね年齢の近いペアであり、大学の学部生、大学院生、社会人からなる。

P-01～P-08は、ディスカッションに参加するという名目で来てもらった初対面の参加者二名が、同じ部屋で待機しているときに行われた雑談である。この際の雑談も録音されていたことは、会話参加者に事前に承諾を得ている。

P-09～P-11は、大学内のカフェで収録したものである。協力者にはカフェに直接来てもらい、同じテーブルに座った初対面となる二名に、内容は何でも良いので50分間自由に話してもらおうよう伝え、調査者は店外に出た。データに用いたのは、調査者が二名の元を離れてから、50分経過して戻ってくるまでの間に行われた雑談である。ただし、P-11のみICレコーダーのトラブルにより、会話開始から20分ほど経過した後の部分のみをデータに用いている。採取した音声は、文字化を行い分析に用いた。文字化の規則は基本的に宇佐美（2007）に従った。

### 3.2 スタイルおよび独話的発話の定義

スタイル、および独話的発話の定義は岡崎（2018）に則る。本研究で用いる単位としての「発話」は、統語的単位である「文」に基づく。ただし、感動詞等の相槌は他の発話と同等には扱えないため、「発話」に含めなかった。相槌には、発話の途中で挟まれる「はい」「そう」といった聞き手による発話も含まれる。

スタイルは、「デスマス形」「非デスマス形」「その他」のいずれかを、各発話末の形式により認定した。「デスマス形」は、発話末が「です／ます」やその活用形、または、それらに文末詞や文末詞的に用いられた接続助詞の付加された発話である。「非デスマス形」は、発話末に「です／ます」やその活用形が用いられておらず、用言の終止形や名詞で終了している発話、あるいはそれらに文末詞や文末詞的に用いられた接続助詞の付加された発話である。「非デスマス形」には名詞一語文も含まれる。発話末まで言い切られなかった発話や、デスマス形・非デスマス形の対応関係をもたない発話は「その他」とした。

本研究における「独話的発話」は、「聞き手不在であるかのように発話され、思考や心情が率直に表出された非デスマス形発話」である。その抽出方法は、発話をIF、IP、独話的発話に分類するための規準を作成した岡崎（2018）に則る。すなわち、非デスマス形の内、「だ」「か」「な」「かな」「っけ」といった、聞き手に宛てられていないことを表す文末詞と共起している発話、自問となる内容の発話で文末に上昇音調を用いている発話、発話末に文末詞や上昇音調といった要素が共起していなくても、「率直な感情を表出するとき」「自己訂正を行うとき」「冗談の文脈で相手の発話を繰り返すとき」の発話を「独話的発話」とした。

分析手順としては、まず、全データから発話を認定し、すべての発話を、デスマス形、非デスマス形、その他に分類した。次に、非デスマス形から独話的発話を抽出し、各事例の分析を行った。

## 4. 結果と考察

11組による会話の発話総数は5017であった。スタイルの内訳は、デスマス形が3,112（62.0%）、非デスマス形が922（18.4%）、その他が983（19.6%）であった。すべての話者がデスマス形を非デスマス形より多く用いていた。非デスマス形の内、独話的発話は381であり、非デスマス形の42.4%を占めていた。

独話的発話が用いられていた各事例を分析したところ、独話的発話は「話題の境界」で用いられることにより、話題管理上の機能を果たしていることが見出された。その際のパターンとしては、①独話的発話が話題の継続に利用されたケース、②独話的発話が話題の移行に利用されたケース、③独話的発話が話題の継続・移行の両方に利用されたケースという、三つが確認された。以下、この三つのパターンそれぞれの事例をもとに、独話的発話の機能について論じる。

### ① 独話的発話が話題の継続に利用されたケース

例（3）では、M03が、F06に所属する学科を尋ねている（01行目）。01-08行目で、

F06の所属する学科と、そこに入った理由についてのやりとりがなされた後、09, 10行目で、やりとりをスムーズに終わらせる「連鎖終結の第三部分(sequence-closing third)」(Schegloff, 2007) が置かれることで、「話題の境界」が形成されている。そして、0.5秒の間隙(11行目)の後、M03が「社会起業か」(12行目)と独話的発話を行っている。これにより「社会起業(学科)」という話題の継続が適切である状況が形成され、M03自身により継続されている(13-15行目)。

12行目の「社会起業か」は、直前の話題内容を表す名詞が含まれ、かつ発話自体はその話題について特定の展開を促さないという点で、「掴み出し」にあたる。話題が終結する可能性を予期させる「話題の境界」において、このような直前の話題内容を含む独話的発話を行うことは、話者がその話題を継続させることに正当性を与える。

### 例(3)【P-06】

- 01 M03: えー、人間福祉の何、なんか、いろいろあ- [き- 起業とか、  
 02 F06: [あ、社会起業です。  
 03 M03: あー (はい) 社会起業学科、へー。  
 04 F06: 面白そうやな (はいはいはい) ーみたいな ##  
 05 M03: あだから将来なんかそういうの考えてるん (hh) ですか hh。  
 06 F06: 全然考えてなかったん [ですけど、  
 07 M03: [あーなんか、学問として [楽しいかなみたいな =  
 08 F06: [そうですね。  
 09 M03: = へー。  
 10 F06: °ん°。  
 11 (0.5秒)  
 12→M03: 社会起業か。  
 13 でも社会起業学科とかやったらそのなんてゆうんでしょう。  
 14 友達じゃないですけどなんか知り合いとかやったらなんか起業してみたいな人  
 15 多い [んじゃないですか。  
 16 F06: [あーいますね。

このように「掴み出し」は、「話題の境界」において独話的に発話されることで、話者に話題継続の機会を提供する機能を果たすものである。デスマス形会話においても、このような機能を果たす独話的発話が用いられていることがわかる。

### ② 独話的発話が話題の移行に利用されたケース

例(3)は、「話題の境界」における独話的発話が、直前の話題を継続する機会として利用されている例だったが、次の例(4)は、直前の話題を終結させ、新たな話題を開始するケース、すなわち話題の移行に利用されているケースである。大学院の修士2年生であるF03と、1年生であるF04が、修士論文の口頭試問に関連し

て「U先生」を話題にしているが(01-07行目)、08行目で2秒の間隙が生じることにより、「話題の境界」が形成されている。ここでF04が、自分の審査委員は「誰になるのかな」(09行目)と独話的発話を行い、それにF03が反応を示すことで、話題が「U先生」から移行されている(10-12行目)。

これは筒井(2012)でも観察された、一つの話題が開始されるきっかけとなる独話的発話である。「話題の境界」における独話的発話は、話題継続だけでなく、話題移行のきっかけを提供できる発話でもあることがわかる。

#### 例(4)【P-02】

- 01 F04: <U>先生はけっこういろいろな面で、面接されて(あー)、いる、みたい、で  
 02 すよね?  
 03 F03: あーそうですね。  
 04 F04: んー。  
 05 F03: なんか、慣れてる感じも、  
 06 F04: そうですね。  
 07 F03: しましたね。  
 08 (2秒)  
 09→F04: えーあたしは誰になるのかな。  
 10 F03: あーなんか、そうですね。  
 11 おしえ、多分教えてもらえなか、ったと思うんで(んー)、まあ開けてみての  
 12 お楽しみみたいなhh、感じで。

#### ③ 独話的発話が話題の継続・移行の両方に利用されたケース

次の例(5)は、話題の移行と継続、両方に利用された独話的発話のケースである。同じ佐賀県出身であることが会話中にわかった両者が、地元の路線である「唐津線」について話している。「唐津線」の話題は08行目まで続いているが、09,12行目の間隙と、10,11行目の実質的意味をもたない発話を経ることで、「話題の境界」が形成されている。そこで、F13が「懐かしい」(13行目)と独話的発話を行い、F14が、この大学にも佐賀出身者がわりといるのではないかと応じている(14行目)。

#### 例(5)【P-11】

- 01 F13: 唐津線に乗るともうめんどくさいんですよ。  
 02 F14: あ、そうなんですか[逆に?  
 03 F13: [すっごい遅い。  
 04 F14: hhhh[あー。  
 05 F13: [1時間に1本ぐらいしかないからhh。  
 06 F14: hhhh  
 07 F13: んー、いっこ乗り遅れたら(はい)もう、待たなきゃいけない。  
 08 F14: hh

- 09 (2秒)  
 10 F13: [そっか。  
 11 F14: [んー。  
 12 (4秒)  
 13→F13: 懐かしい [hh。  
 14 F14: [hhhh [佐賀わりと〈A〉大いと思うんですけどね。  
 15 F13: [ほーとー  
 16 ほんとですか？

14行目は「懐かしい」の直後になされており、ここで話題は明らかに「唐津線」から移行しているため、「懐かしい」は話題を移行する発話であると言える。だが一方で、「懐かしい」は、直前の話題である「唐津線」に対するものであるとも解釈できるため、話題を継続する発話でもある。どちらも解釈できるのは、会話における話題の階層性によるものである。両話者は互いに佐賀県出身であることがわかってから「唐津線」に至るまで、13分ほどの間、一貫して「同じ地元である佐賀県」について話しており、それは14行目以降も継続されている。したがって、「懐かしい」は、直前の話題である「唐津線」に対してのみならず、「同じ地元である佐賀県」という上位階層の話題に対するものとしても解釈することができる。そのため、14行目以降は、下位階層の話題としては移行されているが、上位階層の話題としては継続されているということになる。「話題の境界」でなされた「懐かしい」という独話的発話は、話題の継続と移行、どちらにも解釈可能となるような発話として提示されることで、それまでの話題を断ち切ることなく、次の話題へスムーズに移行することを可能にしているのである。

「懐かしい」は、特定の話題を取り立てる名詞（句）ではないという点で、「掴み出し」とは異なる。だが、直前の話題内容であることを表しており、かつその話題について特定の展開を促さないという点で、「掴み出し」と同様の機能を果たしていると言える。

以上、デスマス形会話で用いられる独話的発話は、「話題の境界」で用いられることにより、話題をスムーズに継続、あるいは移行する機会を提供する機能を果たしていることを論じた。独話的発話によるこのような機能は、平本（2011）で既に主張されていることではあるが、本研究では、当該の機能がより多様なタイプの独話的発話により可能であることが示された。また、筒井（2012）では、話題開始のきっかけとなる独話的発話は、親しい間柄で用いられやすいのではないかと考察されているが、例（4）のように、初対面のデスマス形会話である本研究のデータでもいくつか確認された。初対面だからこそ、「話題の境界」が生じやすく、また、どのような話題が適切なのかについて、より注意深く探る必要があるためと考えられる。

スタイルシフトは、ポライトネス理論が援用されることが多いように、情意的機

能の側面から説明されることが多い。これには、非デスマス形が一般的に、普通体や常体として、目下や対等な相手、親しい相手に使われる、丁寧さをもたない表現、心理的距離が近いことを表す表現と考えられていることも関わっている。デスマス形会話で用いられる独話的発話の場合、相手への敬意を損なうことなく、会話の雰囲気や緊張感を緩和したり、相手との心理的距離を縮めたりする情意的機能を果たすとされていた (Okamoto, 1999; 三牧, 2000; Hasegawa, 2006等)。本研究では、非デスマス形には異なるスタイルが混在することを踏まえ、非デスマス形の一つである独話的発話がデスマス形会話で用いられるのは、情意的機能だけでなく、話題管理に関わる談話機能も果たすためであることが示された。スタイルシフトは、話者が会話を円滑に進める上で、スタイルという言葉手段を巧みに用いていることの反映であると言える。

## 5. おわりに

本研究では、デスマス形会話で用いられる独話的発話の談話機能を検討した。その結果、独話的発話は「話題の境界」で用いられることにより、話題管理上の機能を果たしていることが見出された。その際のパターンとしては、①独話的発話が話題の継続に利用されたケース、②独話的発話が話題の移行に利用されたケース、③独話的発話が話題の継続・移行の両方に利用されたケース、という三種が確認された。

本研究は、デスマス形会話における非デスマス形へのシフトという枠組みで行ったものだが、本研究で論じたような独話的発話の機能は、平本 (2011) や筒井 (2012) で示されているように、非デスマス形主体の会話であっても観察されるものである。従来、スタイルシフトの研究は、デスマス形と非デスマス形の二項対立で論じられてきたが、非デスマス形の中に異なるスタイルが混在する以上、非デスマス形の中でのシフトも考察に値しよう。すなわち、非デスマス形主体の会話において、独話的発話がどのように用いられているのか、IF、IP との間でどのようにシフトされているのかといった問いである。今後の課題としたい。

## 註

- 1) 他に「丁寧体／普通体」「敬体／常体」「ですます体／だ・である体」といった用語があるが、本稿では形態的特徴のみを指す「デスマス形／非デスマス形」を用いる。同じく形態的特徴を指す「ですます体／だ・である体」の場合、「だ・である」が会話ではほとんど用いられないという点で、本研究にはそぐわない。また、「デスマス」と片仮名表記とするのは、文章における可読性を高めるためという便宜上の理由による。
- 2) 先行研究では、「スピーチレベル」という用語も用いられているが、本稿では「(スピーチ)スタイル」を用いる。言葉の「スタイル」という用語は本来、より広い言語変種を含むものであるが (cf. 渋谷, 2016)、本稿では、文末形式によって区別される「デスマス形／非デスマス形」を指すものとする。

- 3) 本研究で用いたデータからの抜粋である。会話例中の下線は、非デスマス形であることを示す発話末の形式であることを指す。その他の記号については、「会話例に用いた記号凡例」を参照のこと。
- 4) 「ポライトネス理論」とは、Brown & Levinson (1987) が提唱した、会話参加者が円滑な人間関係を構築・維持するための言語行動を説明した理論である。
- 5) 「制度的会話 (institutional talk)」とは、しばしば「日常会話 (ordinary talk)」と対置される会話のタイプであり、授業、会議、法廷、診療等、多岐にわたるタイプの会話が該当する。制度的会話では基本的に、会話の目的や会話参加者の役割、誰が、いつ、何を、どの程度発言するべきかといったことへの理解が、会話参加者間で共有されている。
- 6) 「連鎖組織 (sequence organization)」とは、会話分析で用いられる用語であり、社会規範的に期待される複数の発話の連なりである。連鎖組織は、ある発話がなされた場合、その次にどのようなタイプの発話が行われるべきかという予期を可能にする。例えば、「今時間ある？」という問いかけは、依頼や誘い等の連鎖の開始を予期させる (cf. Schegloff, 2007)。

#### 会話例に用いた記号凡例

(発話)	相手の発話中になされた相づち
(秒数)	間隙の秒数
[	隣接する発話の同記号がある箇所から発話の重複が開始
-	直前の音の声門閉鎖音による発話の中断
=	隣接する発話の同記号が付された発話と立て続けに発話
° 発話°	小声で発話
?	直前の部分が上昇音調
h	笑い、または直前部分を笑いながら発話
#	聞き取り不可
【 】	注記
< >	プライバシー保護のための伏せ字

#### 参考文献

- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (2002). The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N. & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 10: 150-163. CSLI Publications.
- Cook, H. M. (2008). Construction of speech styles: The case of the Japanese naked plain form. In Mori, J. & Ohta, A. S. (Eds.), *Japanese Applied Linguistics*:

- Discourse and social perspectives*, 60-108. Continuum International Publishing.
- Hasegawa, Y. (2006). Embedded soliloquy and affective stance in Japanese. In Suzuki, S. (Ed.), *Emotive Communication in Japanese*, 209-229. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Ikuta, S. (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science*, 5(1): 37-53.
- Ikuta, S. (2008). Speech style shift as an interactional discourse strategy: The use and non-use of *desu/masu* in Japanese conversational interviews. In Jones, K. & Ono, T. (Eds.), *Style Shifting in Japanese*, 71-90. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Megumi, M. (2002). The switching between *desu/masu* form and plain form: From the perspective of turn construction. In Akatsuka, N. & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics* (Vol. 10), 206-219. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Okamoto, S. (1999). Situated Politeness: Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversations. *Pragmatics*, 9(1): 51-74.
- Saito, J. (2010). Subordinates' use of Japanese plain forms: An examination of superior-subordinate interactions in the workplace. *Journal of Pragmatics*, 42: 3271-3282.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8: 289-327.
- 生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12 : 77-84.
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分けー母語場面と接触場面の相違ー」『社会言語科学』6(2) : 12-26.
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用ースピーチレベルシフト生起の条件と機能ー」『学苑』662 : 27-42.
- 宇佐美まゆみ (1998) 「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」『ヒューマン・コミュニケーション研究』26 : 49-61.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能ー敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆することー」『語学研究所論集』6 : 1-29.
- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2) (研究代表者：宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 宇佐美まゆみ (2015) 「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望ー日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心にー」『社会言語科学』18(1) : 7-22.

- 大浜るい子・鈴木雅恵・埴田美有紀 (1998) 「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『教育学研究紀要』44(2) : 389-397.
- 岡崎渉 (2016) 「上級日本語学習者による独話的発話の使用実態」『留学生教育』21 : 9-16.
- 岡崎渉 (2017) 「スタイルシフトにおける非デスマス形はいかに情意を表すか」『表現研究』105 : 21-30.
- 岡崎渉 (2018) 「非デスマス形の機能による分類方法の検討—情意的態度と聞き手目当て性の観点から—」『兵庫教育大学研究紀要』52 : 19-31.
- 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』16(3) : 39-51.
- 渋谷勝己 (2016) 「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム—山東京伝を例として—」『社会言語科学』18(1) : 23-39.
- 申媛善 (2007) 「日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して—」『日本語科学』22 : 173-195.
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14 : 7-28.
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- ナズキアンフミコ (2007) 「インタビュー談話における常体の機能」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育V』141-155, くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 「言表態度の要素としての<丁寧さ>」『日本語学』10(2) : 65-75.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法7 第13部 談話・待遇表現』くろしお出版
- 平本毅 (2011) 「話題アイテムの掘み出し」『現代社会学理論研究』5, 101-119.
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 I : 人文科学』42(1) : 39-51.
- 三牧陽子 (1997) 「対談におけるFTA 補償ストラテジー—待遇レベルシフトを中心に—」『多文化社会と留学生交流』1 : 59-77.
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『多文化社会と留学生交流』4 : 37-53.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』5(1) : 56-74.
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- 宮武かおり (2007) 「日本人友人間の会話におけるスピーチレベルの使用実態」『TUFUS 言語教育学論集』2 : 19-31.

**付記**

本稿は2016年に、広島大学に受理された博士学位請求論文『日本語の雑談における母語話者と上級学習者によるスタイルシフトの研究－非デスマス形の指標的機能の観点から－』（甲第7068号，未公刊）の一部に加筆・修正を行ったものである。

（おかざき わたる・兵庫教育大学）